

## マタイ 6・24-34

今日のみことばは、山上の説教の一連のみことばの中でも最もポピュラーなものであるかもしれません。これらのみことばが山上の説教の中に収められたものであることを知らなくとも、一度は聞いたことがあるという人も多いのではないかと思います。この数週間の主日ごとに山上の説教のみことばに耳を傾けてきた私たちにとっても、今日のみことばはホッとさせてくれるような響きを持っています。そのことを味わうために、先週までのみことばをもう一度思い起こしてみましょう。

人を殺してはならないという神の掟が求めていることは、単に殺人というような恐ろしい犯罪に手を染めなければよいというものではない。人に対して「馬鹿」とか「愚か者」というような侮蔑のことばを吐くことも、殺人と同じように地獄の罰に値する。心の中によこしまな思いを抱かせるようなものがあれば、自分の手足や、目であっても切って捨て、えぐりだしてしまいなさい。たとえ片方の手足や目がなくても全身が地獄に投げ込まれるよりはましである。決して復讐してはならない。右の頬を打たれたら左の頬を向けなさい。

先週まで聴いてきたこのようなみことばは、あまりにも厳しすぎて、私たちには到底実行不可能と思われる。それに対して、空の鳥や野の花の上にも注がれる神の愛の摂理を説く今日のみことばは、確かに私たちの心の緊張をほぐしてくれます。私たちにはとてもついて行けない厳しさをもって、高いところから語りかけておられるように感じられたイエスが、今日は私たちのごく近くに寄り添って語りかけていてくださるように感じられます。

「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは鳥よりも価値あるものではないか。」「野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働きもせず。紡ぎもしない。・・・今日生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。」これらのみことばは、私たちを日常の目先のことにとらわれた、せせこましい生き方から解放し、全てを包む大らかな神の愛の世界に誘ってくれます。山上の説教のイエスのみことばをよく味わうなら、私たちには厳しく聞こえるその表現の根底には、全体を通して、このような大らかな神の愛の世界が広がっていることがわかってくることでしょう。

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたが天の父の子となるためである。父は悪人の上にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者

にも正しくない者の上にも雨を降らせてくださるからである。・・あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者になりなさい。」先週の日曜日に聴いたみことばです。このようなみことばを私たちはどのように受け止めたらよいのでしょうか。これらのみことばは、決して神のように完全ではありえない私たちのありようを、自らもその中に身を置くことによって知り尽くしていただくイエスの口から出たみことばです。

決められたルールの中で共同生活を営み、同じノルマを課せられた者たちとして、共に生き、共に働く中で、歩調を乱し、足を引っ張る仲間に対して苦々しい思いを抱き、ついつい荒いことばを投げつけてしまう経験をしたことのない人はいないに違いありません。イエスもまた、御自分につき従い、四六時中お側近くにいながらも、イエスが言われることを理解できずにいる弟子たちに対して、「なんと物分りの悪い、信仰薄い者たちよ」と嘆きのことばを口にされることも、一度や二度のことではなかったのです。敵対心をむき出しにして、悪意に満ちた論争を仕掛けてくる律法学者やファリサイ派の人々に応えられるイエスのおことばは、時には怒りにふるえていることが、文字を通して感じられるほどです。

「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるう。自分の兄弟だけに挨拶してとどろでどんな優れたことをしたことになろう。」「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」とイエスは言われます。けれども、親しい仲間内の関係と、そうではない、敵意を持っているかもしれない見ず知らずの人に対して全く同じように接することなど、私たちの世の中ではありえないことです。やられたらやり返す、こんな、私たちにとっては当たり前なことが出来ずにいる鬱憤が、私たちの周囲のいたるところに鬱屈しているように感じられる世の中です。そんな社会にどっぷりつかって生きている私たちの只中に身を置いて、イエスは天の父である神を指し示してくださっているのです。その御前では誰一人、自分が正しいとは言い張れない、誰も自分自身の内面をごまかすことは出来ない、そのような天の父がおられることを私たちに示してくださっているのです。

「あなたがたは、神と富とに仕えることは出来ない。」今日の福音のはじめにイエスはこのように言われています。自分の幸せを築き、それを守ってゆくためには、何といたってもお金の力が必要な世の中です。そのような世の中で、私たちはどのように生きているのでしょうか。自分の幸せを追求するためには、わずらわしい関わりを遮断し、自分だけを頼りに、自分だけを基準に、周りの全ての人を競争相手か邪魔者とししか見ることの出来なくなっていると言え過ぎになるのでしょうか。この世の富の力が支配する、私たちが作り出しているこのような社会のありさまを味わい尽くしてくださったイエスは、そこからの

出口として、私たちに天の御父を指し示してくださるのです。イエスが指し示しておられる天の父は、イエスが私たちと同じひとり人間として、私たちの社会の底の底から目を上げて、見上げておられる天の父です。イエスは十字架の死に至るそのご生涯の全ての時において、天の父へのその眼差しを失うことなく生きられたのです。そのような生き方をもって、イエスは父の子として生き抜かれた御自分の御生涯をも私たちに示しておられるのです。イエスは御自分が生きられた、そのような天の父の子として生きる生き方こそ、神の愛のうちに創造された人間である者たちの真の生き方であることを私たちに示し、私たちに招いておられるのです。

「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」今日の福音の最初のみことばは、私たちの心を支配しているこの世の富への執着を放棄することを命じているものではありません。この世の富の誘惑に引きずられるままに生きざるを得ない、私たちへの同情のことばです。今日の福音のみことばをそのように受け止め、イエスのみことばに誘われて、空の鳥、野に咲く花に目を向けたいと思います。このようなイエスのみことばに身を委ねることが出来る時、この世の富の争奪戦に身も心も消耗している私たちは、真のいやしと新たな力を見出してゆくことが出来るのではないかと思われます。この世の生活を生きる私たちには見出すことが困難な、父なる神の大いなる愛の広がりの世界をイエスの今日のみことばに導かれて味わう恵みを願って祈りたいと思います。

神を信じるということは、神は存在するということを主張することに過ぎないではありません。山上の説教全体において示されているように、私たちのすべてを知っておられる神を真実畏れているか否かが問われているのです。同時に、私たちの日々は、全ての者の創造主であり、私たち全ての者の父である神の大いなる計らいの中にあることを日々の生活の中でどこまで受け止められているかが問われているのです。「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の労苦は、その日だけで十分である。」日々の思い悩みの中に生きる私たちにとって、今日の福音のみことばが私たちの今日の疲れを癒し、明日を開く力をもたらすことを願ってともに祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高